

お伽話

金の兎

とよ子



昔々或處に一軒の樵夫の家がありました。お父さんは毎日山の中に入つては大きな木を切り倒して薪を造らへたり、材木を造らへたりして居りました。處や或日のこと樵夫は自分の切り倒した木の爲めに足に怪我をしましたので夫れの直る迄は仕事に出られなくなりしました。そこで樵夫は三人のむすこを呼んで

父「お父さんは此通り大きな怪我をしたから明日から仕事に出られない。仕事に出ないと云と毎日の御飯も食べる譯に行ないが何したものだらう」と云ひますと

太郎「お父さん、それでは私がお父さんの代りに行きますせう」と云ふのではお父さんは大層悦んで

父「それは有りがたい、それでは御苦勞だが、行つて来て貰う、斧は私のがよく切れるから、持つ

て行きなさい」と云ふので太郎は仕度をして夜のまだよく明けなの中に家を出掛けました。出掛ける時にお母さんはお辨當に握り飯と粟の餅とを下さいました。太郎は急いで山に入つて一生懸命木を切つて居りました。頓がてお晝頃になつて、そろ／＼お辨當を食べ様と思つて居ると何處よりか一人の老よつた乞食が出て来て

「モシ／＼、私は昨日からまだ御飯を戴きませぬ、何うかおひすびでも粟の餅でも宜しう御座いますから少し下さいませし」と云ひました。太郎は中々しはん坊なので承知しませぬ

太郎「ア、それはお氣の毒だがね、是は僕のお辨當だから遣れないよ」と云つて少しも遣りませぬでした。

其中に仕事も一方つきましたから太郎はお辨當を食へ様と思つて風呂敷包を明けて見ると是は不思議、確かに入れてあつた握り飯も粟の餅も皆失くなつてしまつて影も形もありません、仕方がないので太郎はひもじいお腹を我慢して夕方漸々家に歸つて

太郎「母さん、僕は今朝お辨當を間違へて持つて行きましたかね」と聞きますと母さんは怪げんな顔をして

母「いゝえ、間違つては居ませんよ外に誰もお辨當を持つて行く人がないのだから確かに違ふ筈はありませんよ、なぜですか？」とお仰るので

太郎「夫れでもね、僕が開けて見たら何も入つて居ませんでしたよ是れ此通り」とお辨當を開けて先刻の空の所を見せようと思ふと是は又不思議お辨當の中は何時の間にやら元の通り握り飯と粟の餅とで一杯でありました。太郎も母さんも不思議

と云ひながらお父さんにも話して其日は夫れで済みましたがお切て翌日になつて太郎は昨日の通りお辨當を造らへて貰つて山へ出掛けて頻りに木切りをして居ると又お晝近くになつて一人の乞食が出て来て

「太郎さん、私は一昨日からまだ御飯を戴きませんお腹がペコペコで逆も歩かせせん、何うぞお辨當を少し分けて下さいませんか」と云ひました、太郎は相變らずしはん坊で中々遣りそうに

もしません  
太郎「いけないよ」僕のお辨當はね、お握りと粟の餅だよ、お前などに遣る様なものではないよ」と

云つて少しも遣りませんでした。其中に一方づけ仕事をしまつて、ドレかいしいお辨當を食べ様かと大きな木の根へ腰を掛けてお辨當の包みを開けますと是はしたり又もお辨當は空の箱握り飯や粟の餅は又も影も形もありません、太郎呆れて是はマア何うしたのだらう、とひとり言を云ひながら今日は直に仕事を止めて家へ駆けて行つて母さん

に  
太郎「母さん、今日も僕のお辨當は空でしたよ毎日、お辨當なしではお腹がへつて仕方がないから今日はすぐ歸つて来ました」と云ひながらお辨當を開けて母さんにお目に掛け様と思ふとお辨當は今朝母さんが詰めて下さつた通り握り飯と粟の餅で一ぱいになつて居ます。太郎は

「オヤツ、お辨當が」と云つたがり暫くは開いた口が塞がりませんでした斯くて其翌日も其翌る日も太郎のお辨當は朝一杯詰めて置いて晝には

は影も形もありません、そして毎日例の乞食は例の通やつて来ては

「太郎さん何うぞ少し下さい」と云つて居ました。太郎は一度も遣つたことがありませんでした。遂々しまいに太郎はお辨當の中が無くなるので山には半日さり行かれなくなりました。そこでこんどは次郎が

次郎が

「夫れでは今度は僕が行かう」と云ひますので其翌日は次郎が例のお辨當をこしらへて貰つて朝早くから山の奥へと行きましました。

次郎は一生懸命木を切つたり倒したりして居ますと頃がてお晝近くでもあらうかと思ふ頃に一人の乞食が蹠跟と然も疲れた様な風をして出て来て

「次郎さん、私は今日で幾日も幾日もお飯を戴かないのでお腹がすいてたまりません、今に死にそうです、何うぞ、何でも宜しう御座います、食べ物物を少し下さいまし」と云ひました。此次郎も太郎にまけない、しはん坊なので

「いけなしいよ、お前などにやる食物は何もないよ、と云ふて平氣で仕事をして居ました。夫れで

も乞食は「次郎さん、是はあなたのお辨當でせう、少し分けて下さいませんか」と云ひますと次郎は眼を

圓くして驚いて飛んで来て今しも乞食が手を付け

「是は僕のお辨當だよ、お前などに遣るもので

つてしまひました。

そこで次郎もお腹がへりましたので、ドレーと休

みと傍の木の根へ腰を下してお母さんのこしらへ

て下さつたおいしいおむすびと粟のおからん、さ

と是れ、又してもお辨當は空の箱です。次郎は

お腹は飢る食べる物はなし仕方がありませんから

仕事は止めて家へ歸つて來ました。今朝來る時に

は別に重いとも思はなかつた斧もお腹のへつたせ

いか馬鹿に重くなり、足はつかれて次郎の家が向

ふに見える様になつた頃には何んだか氣が遠くなつた様で苦しくたまりませんでした。家の近くへ來た頃はもう、何うにもこらへきれなくなつて次

郎はしく／＼泣き出しました。門口で掃除をして居らしつた母さんは之を見て

「オヤ、次郎や何うかおかしかへ、何處か怪我でもしたのかへ」と大層びつくりなさつた様でしがだん／＼話を聞いてお辨當がなくなつた丈だと云ふので安心なさいました。そして母は

「何うして、そうお辨當がなくなるのだから不思議だねえと云はれながら次郎のお辨當を開けて見ると、なんのこと、お辨當はなくなる所ではなくおむすびも粟の餅も今朝母さんの詰めた通りちやんとして御飯一粒もなくなつた様ではありませんでした。之を見た樵夫夫婦は何故斯うお辨當がなくなるのであらうかと不審でたまりませんでした。さて翌日になると次郎も、もう、行くのがいやだと云ふので、こんどは三郎が行くことになりました。處がお父さんもお母さんも三郎が小さいので心配だからと云ふので三郎をやることは承知しませんでした。併し三郎は

三郎「お父さん大丈夫ですよ僕はお晝のお辨當なんか食なくつたつてお腹が飢はしませんよ大丈夫で

すから遣つて下さい」と云ふので仕方がありません外に行く人としてはないのですから今度は三郎が行くことになりました。そこで母様は又々例の通りおむすびと粟の餅とをこしらへて下さいました、どうせ又失くなるなら少しでも宜からうと、こんどは太郎や次郎の時の半分位しか入れて下さいませんでした。三郎は之を腰につけてお父さんから貸して戴いた重い斧を肩にかついで山の奥へと出掛けて行きました。

山の奥へ行つてから三郎はお辨當を木の根に置いて一生懸命木こりをして居りました。スルト又々お晝近くになつたと思ふ頃一人の老よつた乞食が何處からか出て来て

「三郎さん、私は今日で一週間ばかり御飯を戴きません、お腹が飢つて今にも死にそうです」と云ふのを見ると頭はぼう／＼と髪がみだれて着物にはあちらこちら破れて身体が見えて居る。其身体はと云へば手と云ひ足と云ひ眞黒で、まるでか湯などへ入つたことのない人の様です。その上一週間はかり食べないと云ふのですから頬はこけ眼

はくぼんで一本の杖をたよりに蹠跟よるけながら歩いて居る様子は成る程見るからに今にも死にそうです。三郎は此憐れな様を一眼見るや否や根が慈愛深い子のことですから、如何にも氣の毒に思つて

三郎「夫れは〱無々困つたらうね、何か食べるものがあれば上げたいが、今生憎何もない。私のお辨當の中に少しばかりおむすびとあんもがあるかも知れない、あつたらお前さんに上るから持つてお行でなさい。」と云ふので乞食は大喜びで「夫れは有りがたう御座います、お蔭様で命が助かります。」と云ひながら乞食はお辨當を開けて麥の御飯のおむすびと粟の餅とを然もいしそうちに食べて居ました。不思議なことには今日はお辨當はなくなりませんでした。

老乞食は一人むしや〱と三郎のお辨當を食べてしまつて三郎に向つて

「さて三郎さん、何うも有りがたう御座いました。お蔭さまで乞食の命が助りました。御禮にはよい木を教へて上げませう。此山の向ふの谷に大

きな核の木がありますから、それを切り倒して御覽なさい。其根のうちのの中にはきつと金の兎が居ます。夫れを持って町へ行くときつとよいことがありませうと教へて呉れました。そこで

三郎は急いで向ふの谷へ行つて見ますと成る程大きな核の木がありました。斧振り上げて一と打二た折ちやう〱と打ちますと然しもの大木も根本から折れて凄さまじい音をして

メリ〱〱〱ドシンと云ふ響と一所向へ倒れてしまひました。

スルト成程老人の云つた通り其根の下の所に大きな洞があつて其中に一匹の金兎がしがんで居りました。三郎は乞食の云つた通り、之を抱へて町の方へ行きますと道を通る人達は三郎の持つて居る兎を見て誰れも彼も驚いて居りました。所が其中に一人の悪者があつて三郎の後ろから兎の尾を捕へて取つて行かうとしました、そして其の手が兎にさはるかさはらない中に兎の尾と悪者の手とはピタリとくつついてとれなくなつてしまひましたので悪者は「ア、〱、〱、〱と云ひながら三郎に

引かれて行きました。之を見た悪者の友達は之は大變早く援けて遣らうと悪者の帯をつかまへると之はシタリ其奴もビタリとくつついて「ア、、、」と云ひながら引かれ行きました。

サア斯うなると町を通る人達は

「ア、ラ、不思議〜アレヲ御覽よ、面白いものが通るよと、大勢人だかりがして三郎の回りは黒山の様です。あんまり人立ちがはげしいので巡査さんが来る、見れば金の兎に二人の悪者が引かれて行くので之を放さうとおまはりさんが手を伸して悪者の帯にさはると又もビタリとくつついてこんどはおまはりさんも引かれて行きました。スルト向ふから来たのはおまはりさんの知つて居る或

いちいさんとおばあさん、

老人「ホーホ是は〜何うなさつた」と云ひながら一寸巡査のサーベルにさはつたと思つたら又もビタリ、オットトト、、、と云ふ中に是も又すいつなかり、傍に居たおばあさんは驚いて

老女「おちいさん、マア何をするんですよ、年寄のくせに」と云ひながらおちいさんの背中にさはる

とおばあさんの手は其まゝおちいさんの背中にビタリ之もオヤ〜〜と云ふ中に同じくすゝつながり。次に来たのがおちいさんおばあさんの孫むす子と孫むすめ、兄さんは肩からかばんと掛けて學校の歸り妹は手にお辨當と豆細工を持つて幼稚園の歸り、今しもこゝまで歸へて来た所がおちいさんとおばあさんが

「ア、、、大變〜早く来ておくれよ〜」と云ひながらひかれて行くので先づ驚いて飛びついたのが妹の方、おばあさんの帯につかまつたと思ふと之もビタリ

「アラ〜〜兄さん〜大變〜〜早く放して頂戴よ」と云ふので兄さんは驚いて妹の襟首をつかまへると之もビタリ同じくア、、、と云ひながら引かれて行きました。之を見た往來の人々は何うするにも仕方がありません、あれよ〜と云ふばかりで誰も彼も助ける人はありませんでした。それで悪者と巡査と年寄と子どもがヤ、、、と云ふもあればオ、、、と云ふもあり子供はワ〜ワと泣くおちいさんはオット、、、と云ふ色々の

人が色々のことを云ひながらすいづながりにつな  
がつて行くので其奇妙なこと、云つたら又と再び  
あらうとは思はれませんでした。

時に此町の王様の御殿にはかねて生れてから笑つ  
たことのないお姫様が居らつしやいまして母様が  
色々可愛がつて下さいますけれど何うしても笑  
ふと云ふことがありませんでした。そこで遂々王  
様は國中へ布令をして若しお姫様を笑はすことが  
出来たら其人を此國の王様にして遣らうと云ふこ  
とになりました。處が今三郎が金の兎を抱へてす  
いづながりをつ引つ張つて町へ來ますと丁度よいわ  
んばいにお姫様が御殿の御窓から其奇態なかか  
しな様を御覽になつて何時になくキヤツ／＼と  
お笑ひになりました。其處で約束であるからと云  
ふので三郎は王様の御殿へ呼はれて御世繼となり  
三郎のお父さんやお母さんやそれから太郎や次郎  
にはたくさんのお金を下さつて一生仕合せに暮す  
ことになりました。

めでたし／＼／＼／＼

雜 錄

●通俗心理講話

先般帝國大學法醫學教室にて其第一回を催ふさ  
れたる同講話會は本月五日神田三崎町バブテス  
ト教會にて第二回講話會を催ふす由。當日の講  
話及講演者は左の如し

一、日本の舞踊と美容とに就て

理學士

田邊 尚 雄

二、嫁と姑

高島 平三郎

三、フランセットの話

文學博士

福來 友 吉

●最近の幼兒教育關係書

最近に出版されたる幼兒教育關係書は

幼稚園遊戲的手工圖形

本 會 發 行

定價金五十錢

○波多市松著

小どもの研究

實業之日本社發行

定價金七十錢

○岸邊福雄著

お伽話の仕方の理論と實際 實 文 館 發 賣

定價金七十錢

○石田艶著

自然物を應用したる圖形 橫濱勉強堂發賣

定價金貳拾五錢

の四書で何れも幼兒教育必讀の書物と存じます取  
えて御購讀御閱覽を御勸め申します